

「日本写真保存センター」調査活動報告(4)

物故写真家と写真美術館等における保存状況

調査委員会

我が国の写真原板を長期に保存し利活用を行うアーカイブ「日本写真保存センター」の設立を文化庁に要望してはや3年余になる。

平成19年度から2年間、文化庁は「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を日本写真家協会に委嘱し、国内の物故写真家の遺族のもとに残されている写真原板の実態調査と、海外（フランス、アメリカ）における写真保存施設の調査を実施した。実施にあたっては、学識経験者による諮問会議を経て実行に移した。

（会報136、137、138号で既報）

引き続き平成20年度も物故写真家の写真原板調査と国内の写真美術館などでの収蔵施設と保存状況の調査を行い、また、海外の施設（オランダ、イギリス、アメリカ、カナダ）の運営実態と利活用についての調査活動をしている。

国内調査は6～8月にかけて、濱谷浩、渡辺義雄、木村伊兵衛、杉村恒、小関庄太郎、入江泰吉記念奈良市写真美術館、土門拳記念館、田淵行男記念館、飯田市美術博物館（藤本四八）、日本カメラ博物館（名取洋之助、菌部澄、中村正也、稻村隆正、鈴木八郎）で調査した。

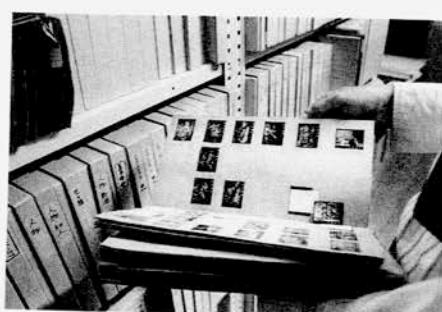
調査には調査委員として金子隆一、高橋則英、吉田成、白山真理、早川与志子、山口孝子が、補助員として小池汪、高井潔、今駒清則と松本徳彦が関わった。

几帳面に整理された濱谷浩

神奈川県大磯駅に出迎えられた多田亞生氏の車で濱谷浩氏宅を訪問。著作権継承者の片野恵介、多田氏の案内で濱谷氏が生前建てた別棟の収蔵庫を調査した。6畳ほどの部屋4室に写真原板や作品、書籍、撮影機材などを整然と分別し



濱谷浩の雪国や裏日本、学芸諸家などのネガが保管されている収蔵庫



テーマ毎に几帳面に整理されたコンタクト帳

て収蔵されている。原板は金属製の棚と桐タンスに、無酸性紙ストレージボックスと桐製の木箱にテーマ毎に収められていた。庫内は24時間空調16°C、55%RHに設定され、個人の収蔵庫としては完璧に近いものであったが、壁面に使われているベニヤ合板からの接着剤臭気が残っていることが気懸かりである。

原板の保存は整理も含め几帳面にされていたが、一部のモノクロネガ、カラーポジに酢酸臭やカビが発生しているものが散見された。密着やブルーフ（印刷原稿）なども揃っていて、収蔵するキャビネットの扉には収納品目録が貼られていて、内容や所在を確認するのが容易に行なわれるようになっていた。作家のきめ細かい性格が表れていた。モノクロネガ約15,000本、カラー38,000枚（コマ）ほどあった。

福島の小関庄太郎

福島県立美術館の堀宜雄氏の紹介で小関庄太郎氏のネガを調査した。子息庄平氏の経営する宝飾店2階の暗室に保管されていたネガ約3,600本を調査。4枚切りのネガを入れたファイル約30本ずつを250枚入りのキャビネット印画紙の箱に収め、その側面に撮影年月日と内容が細かく記されている。そうした箱が年代順に118箱積み上げられていた。保存状況は良好。県立美術館には戦前に発表した芸術写真の写真原板が遺され、1932年～1951年頃までのアルバム17冊が保存されていた。

大正末期に活躍した地元作家の佐藤与氏の手札判のガラス乾板（イルフォード製）が約2,000枚保存されていた。一部に銀鏡化したところもあったが概ね良好であった。

77,000枚に及ぶ入江泰吉

入江泰吉氏が撮影された奈良大和路の風物を捉えた写真原板のすべてが奈良市に寄贈され、奈良市写真美術館で收



印画紙の箱に収められた小関庄太郎のネガ群



年月日、撮影地などを記したネガファイル（小関庄太郎）



入江泰吉の仏像や大和路を写したネガ。無酸性の紙箱に整理されている



奈良市写真美術館の収蔵庫。可動式整理棚に原板は収められている

蔵されている。195.96m²の収蔵庫は20°C、45%RHで空調され、展示作品とともに可動式のファイリング棚に写真原板モノクロが約40,000枚、カラーが37,000枚収蔵されている。大半が4×5インチのフィルムで無酸性紙の箱に収め整理されている。展示作品も約2,500点あり、四季折々にあわせて展示替えをしている。

収蔵作品目録はエクセルで6,000点ほどがデータベース化されていて検索することができるが、いまはまだ画像検索までには至っていない。出版物への写真の貸し出しにも応じていてプリントまたはデュープルームを貸し出している。

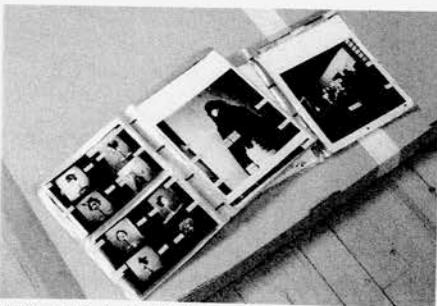
館には明治末から大正期に活躍した工藤利三郎が美術写真集『日本精華』に使ったキャビネや四つ切りのガラス乾板1,025枚も保存されている。

（松本徳彦）

名取洋之助から菌部澄、中村正也まで

財団法人日本カメラ財団（略称JCII）が運営する日本カメラ博物館を調査した。館にはわが国のカメラを網羅した展示室と2つのギャラリーのほかに、地下に図書収蔵庫と閲覧室。作品を保管する約45m²の収蔵庫がある。

ここに名取洋之助のアメリカや中国麦積山などの写真原板1,170本から、岩波写真文庫時代に日本の風土と人々の暮らしを記録した菌部澄氏の11,268本とカラーフィルム4,289本、永井荷風からヌード、踊り子までの官能的な作品で知られる稻村隆正氏のモノクロ2,218本とカラー21箱（未整理）、佐伯啓三郎氏1,442本、本間鉄雄氏3,066本とガラス乾板167枚が保存されている。未整理のものに戦前から指導者として知られる鈴木八郎氏と人物写真の渋谷龍吉氏（段ボール箱15箱）、ヌードからファッショントレーラーまで個性的な表現をした中村正也氏の段ボール箱22箱が別の場所で保管さ



密着とプリント（入江泰吉）



菌部澄のネガの入ったトレー。JCII地下収蔵庫

れている。

収蔵庫内は20°C、50%RHに設定され、大半のネガは受け入れ当時の保存箱に収められたまま保管され、概ね保存状況は良好であるが、一部に酢酸臭のある劣化フィルムも含まれていた。カラーフィルムも劣化したものが多く未整理である。

プリントされた作品についてはパソコンでデータベース化され、作家名、撮影年、撮影対象の内容などから検索することができる。写真原板についてはやっとデジタル化とデータベース化に着手したところである。図書資料に関しては閲覧室で随时検索することができるが、作品や原板の検索は内部管理用として運用している。

土門拳のすべてが

土門拳記念館は山形県酒田駅から車で約20分。最上川近く広がる約2,300m²の敷地に、1階回廊式の建物に大小5つの展示場と収蔵設備が設けられている。

館には土門の展示用作品と写真原板が10数万点収蔵されて、原板のほとんどが密着焼きとともに保存管理されている。通常、密着焼きは一般に公開することはないが、館では代表的な作品の密着をガラスケースに収めて展示していた。

戦後間もなくのフィルムにはコマ番号が焼き込まれていないため、フィルムの1コマ毎にインクで番号が書き込まれ整理されていた。このネガ番号が作品番号として登録され、ネガ管理台帳と連動する仕組みになっている。この番号の

金属製の棚に整理されているネガ。
持ち出し中のネガにはポストイット
が貼ってある





密着が貼られた土門拳の収蔵作品カード



拡大されたコンタクト。手書きの番号が見える



ネガファイルを収めた整理棚

書き込みは写真家自身の場合もあるが多くは助手や奥さんが記入したと言われている。

高山蝶と山岳写真の田淵行男

田淵行男記念館は氏が生前フィールドとした日本アルプスを遠望できる長野県安曇野にある。

氏の写真作品を展示するだけでなく、山登りの仲間たちが集える場としても利用されている。館の周辺は湧水が豊富で信州名物のワサビ田を思わせる雰囲気があった。展示室は330m²近くあり、1階にはワサビ田や湧水を眺めることのできる談話室も設けられている。収蔵庫には写真原板や展示作品が約12万点収蔵されている。

ネガ台帳には撮影時の種々の情報が氏によってびっしり記入され、高山蝶のスケッチや登った山々のデータが克明に記録されていた。氏は東京高師（現筑波大）の博物科を卒し、富山の中学校の教諭を務めていた。NHKラジオ第一「人生読本－私の山－」（1975年8月）で「自分は写真を記録の手段として使いはじめた」と語り、「同じ山道を毎年通るが、山はその度に違って見える」と述べ、写真による記録が後々の研究に役立つものであることを実体験として話している。

「長い歴史をもつ旧家の土蔵に、おびただしい古文書が残っていても目録がなければ活用することができない。目録が作られ、はじめて学者間で利活用の価値が出てくる」と親しい歴史家から聞いたことがある。私たちは撮影には打ち込むがその後の管理台帳まではなかなか手がまわらない。調査活動を通して感じたことは大半の写真家がそうしたメモや記録を残していなかった。記録されていたのかも知れないが遺族によって破棄されてしまったのかも知れない。

プリントした作品やインクジェット紙の裏にネガのコマ



ワサビ田に囲まれた田淵行男記念館



展示室。登山用具やテント、スケッチなどが展示されている

番号を書いておけば、ネガを探し出すことも容易である。その点、デジタルではExifなどのファイル情報が自動的に生成され、撮影日時からコマ番号、GPS、露出やシャッター速度までがデータとして残る。かなりの枚数を撮影してもコマ番号を特定できるパソコンアプリケーションも提供されているのですこぶる便利である。先輩たちが一コマ一コマ手書きした時代と隔世の感がある。

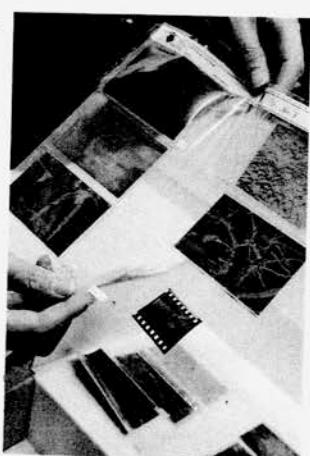
保存センターの諮詢会議でも「写真原板は社会の文化遺産と位置づけ、これを資産に変えよう」といった議論もされている。であればこそ、フィルムでの撮影においては、何を、いつ、どこで撮影したかを記録しておくことが必要だと思う。記入は「ぜひこれを」と思うものだけでもよいので実行したいと実感した。

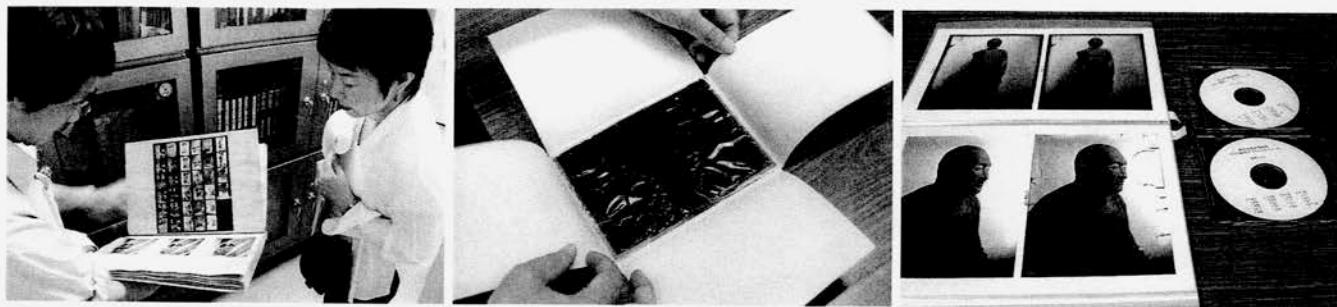
（小池 汪）

寄託されている杉村恒

東京都写真美術館ではプリントされた作品の収集保存、展示を行っている。写真原板は黎明期のダゲレオタイプや、ガラス写真などを除き、基本的には収集していない。今回調査した杉村恒氏のフィルムは例外的な処置として預かっているという。収蔵庫は室温20℃、45%RHと理想的な環境に保たれている。預かっているフィルムはすべてカラーで2,215本と15,979枚の原板があった。保存状況は良好。劣化もあまり無かった。

ネガは新しいポリエチレン製のファイルで整理されている





藤本四八のコンタクト帳

劣化したフィルム

画像の修復前後のプリントと、修復画像のDVD

藤本四八の退色、剥離原板の修復

藤本四八氏の故郷、飯田市美術博物館では仏像や古寺などを撮影した4×5と35mmフィルムを約40,000枚（うち整理済み20,188コマ）を保存している。保管は1階学習室の鍵付き専用戸棚6台とスチール製ドライキャビネットで、寄贈時の書類入れ箱に入れたまま保管されている。室内は20～25°C、30～50%に保たれていて、保存環境はよいが、代表作の「装飾古墳」のフィルムは相当退色していた。日本写真印刷でフィルムをデジタル化して補正してある。また薬師寺、唐招提寺のガラス乾板の一部に乳材面の剥離が見られたので、うち40枚の原板についてはデジタル化し、印刷物を見ながらコンピューターで修復し、新しいデータ（原板）として保存しているという。ネガの整理方法は写真集毎に整理され、テーマ毎の密着焼きもほぼ揃っている。

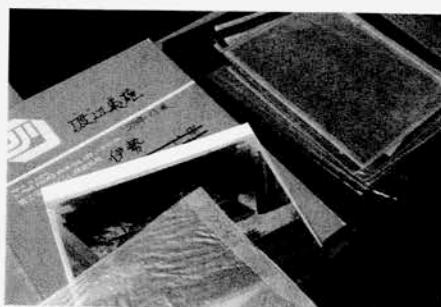
子息が管理する渡辺義雄の原板

東京都郊外小金井市にある渡辺義雄氏宅を訪ね、子息の一雄氏から話を聞く。戦前の作品は戦災にあって焼失し残っていない。戦後についてもグラビア印刷の場合、ネガを渡して製版したため、掲載された写真の多くが返却されたかどうか含め、所在不明であった。

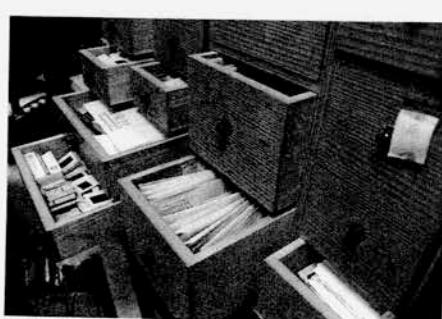
1953年に初めて許可されて撮影した伊勢神宮をはじめ、桂離宮、奈良六大寺、東宮御所、帝国ホテル、新宮殿などの大型カメラで撮った建築写真の原板は残っていた。マンション1階の居間に続く8畳の間に桐のタンスが置かれ、抽



無造作に積み上げられた写真原板とプリント



渡辺義雄の伊勢神宮のネガ



桐の抽出に収められた大判のフィルム

出に大判の写真原板が整理されて保存され、35mmや4×5のフィルムがさまざまな箱に収められて金属製の棚に多数積み上げられていた。室内は常時換気されていて、フィルムの酢酸臭は感じなかった。しかしカラーフィルムの退色は相当進んでいて心配だ。写真の貸し出しはいつでも可能で一雄氏が対応されていた。

(高井 潔)

24時間空調は経済的に大変だ

美術館は築10年以上経ている鉄筋コンクリート造りで、コンクリート壁から出るガスや湿気、結露などの心配はない。温湿度管理も設定通りに行なわれ、写真原板の保存管理に適した環境に保たれている。一方、個人作家の保存状況は必ずしもよいとはいえない。遺族にとって室内を24時間空調することは経済的に大変だし、それ以上に写真原板の劣化に対する知識がほとんど無いのが現状である。

昨年度からの調査活動で保存環境のこと、フィルムの劣化「ビネガーシンドローム」を指摘したが、個人で写真原板を長期にわたって保存管理することが如何に厳しいものであるかを、もっと多くの写真家をはじめ関係者が認識する必要がある。同時にこの問題は「知的財産の活用を図ろうとする」政府に訴え、写真保存センターの設立を推進したい。写真が時代を捉えていることは知られているても、その原板を保存し後世に伝えようとする積極的な活動はこれまであまり見られなかった。いまようやくにして写真の文化的、歴史的価値を認識し、写真原板を残そうとする動きが生まれつつある。写真家の地位や権利を確立することと同じように、記録された写真そのものの価値を高める活動をしなくてはならない。